

議 事 概 要 書

会議名称	令和4年度 第3回社会教育委員会議（臨時会）及び教育委員との懇談
日 時	令和4年11月24日（木）視察：午後12時20分～午後3時00分 会議：午後 3時30分～午後5時00分
場 所	会議：伊那市役所 501、502会議室 / 視察：高速～富県
出席者	伊那市社会教育委員：委員8名（欠席：2名） 教育委員：3名（1名欠席） 事務局：教育長、教育次長、生涯学習課長、学校教育課長、市誌編さん室長、東春近公民館長、社会教育指導員、担当
議 題	下記のとおり
議 事 内 容	
1 開会（教育次長）	
2 あいさつ	<p>教育長：周りの木々を見ても、ここにきて落葉が進んだと感じる。朝も、明るくなるのに時間がかかっている。</p> <p>本日は、教育委員と社会教育委員の懇談会と、第3回社会教育委員会議よろしくお願ひしたい。</p> <p>常々、お礼の気持ちで申し上げているが、教育委員、社会教育委員の皆さまも実によく動いてくださっており、この後も、イベントなどの参加報告があるが、その成果や課題を共有していただいている。そのことに係わり、今年の夏から、伊那市報にイベント参加報告を基にしたコラム「社会教育委員が行く」が掲載され、大変好評であると聞いている。毎月、楽しみに読んでいます。</p> <p>感染症対応だが、すでに3年間という言葉が定着しようとしている。学校や公民館等、文化施設や学童クラブなどは、大変大きな影響や制約を受けつつも、対策を講じながら「出来る取り組みを大事にしていこう」と、工夫し努力を重ねてきている。担当される皆さんに感謝しながら、検討することは検討する、そのことが大事になってきている。</p> <p>以前に、上伊那の保護司の会報に原稿を書く機会があり、次のように書いた。伊那市教育委員会では令和3年度の運営方針で、「コロナ後を見据えながら」という言葉を入れた。その言葉に私たちは、本質化と日常化という2つの方向を願ひとして込めた。コロナ禍、学校の授業がままならない中で、学ぶとはどういうことか。教えるとは、先生方は深い自問を続けた。同じように、いくつもの事例から、感染症の拡大を防ぐには、手洗いやマスクの着用といった普段の取り組みが丁寧に行われるようになっていることが欠かせないことが分かった。これからは、核になること、本質的なことを問いながら、取り組みを丁寧に日常化していくことが一層大事にされていく。今日の後半の懇談では、部活動の地域移行に関わって、そして、学校教育と公民館活</p>

動の関わりを中心とした懇談になる。本質化と日常化、そうしたことも視点の一つになるかと思ひながら、有意義な機会にしていきたい。限られた時間だが、よろしくお願ひしたい。

会長：本日は、教育委員の皆様にもご出席を賜りましての第3回社会教育委員会議である。一昨年以來、新型コロナウイルス感染症拡大の中で、様々な制約を受ける中で、私たちが活動してきたし、今現在、ウイズコロナ時代となっている。この3年間、地域における行事等がすべて中止になっている現状に、大変危惧している。地域の輪を育む人々の交流の機会が、一日も早く再開されることを願う。

本日は、地域と社会教育委員の活動のあり方について懇談いただくが、私たち社会教育委員の取組みの先駆けとして、何かを掴むことが出来たら、大変有意義な時間になるのではないかと思う。よろしくお願ひしたい。

3 自己紹介：教育委員⇒社会教育委員⇒事務局の順に自己紹介

4 令和4年度社会教育委員の実践活動について（進行：会長）

○イベント等参加報告、地域の話題（各委員から報告）

- ・生誕200年井月千両まつり 特別講演
- ・第44回高遠桜大学第3講座
「パラリンピックへの挑戦～銀メダル獲得までの道のり～」
- ・伊那ロータリークラブ特別講演「人情噺 文七元結」（歌舞伎）
- ・第5回森JOY（主催 伊那市ミドリナ委員会）

5 懇談（進行：会長）

「地域や社会教育委員として何ができるか」

（1）学校部活動の地域移行の中なかで何ができるか

（事前に社会教育委員より提出いただいた、（1）議題の学校部活動の地域移行について、学校教育課長から概要及び伊那市の状況について説明）

<懇談>

委員：基本的に運動部だけということなのか。

学校教育課長：運動部、文科系の部活とも基本的なところは同じ形で考えている。

委員：そうすると、一緒に考えるということは非常に難しい。別の方向を向いているという気がする。運動部については、上を目指そうという子と、ただ好きだからやろうという子と、いろいろな子がいる。その中で、どういう風に振り分けていくのか、そこをしっかりと考えていかななくてはいけないと思う。そういう意味でも、この体制は、比較的専門に近い人が指導するようなところから、また、そうではなく専門性があまりなくても大丈夫な人たちが、フォローするような活動までいろいろあると思う。そういうところを分けて考えていく必要があるのではないか。

委員：関連して、今後も、運動の大会であるとか、音楽のコンクールとか、そのようなもの

は、引き続き大事にしていくということなのか。

学校教育課長：幅広い考えの方がいると思う。その中で、保護者の方の意見をしっかり聞けるような形で、協議会の中で意見を聞くであるとか、専門的な見地からの話も必要に応じていただくなどしていきたい。場合によっては、分科会のような形でそれぞれ細部の検討をしていかななくてはいけないと考えている。大会やコンクールについて、まだまだこれから検討をしていかななくてはいけないが、現在、中体連や文科系の大会の本部で、どのようにしていくかは検討が進んでおり、国の方でも地域移行されたグループ、またはチーム、そういったところも、これまでと同じように参加をしていく形で考えていると聞いている。

委員：徐々に学校の先生たちが、部活動に関わらないで、学校の学習面等に力を入れることで、部活動が地域に投げられたときに、指導できる指導者の方が、はたしているのかという心配がある。私の地区で考えてみてもいるのかなど。もしかしたら、才能を持っている方がいるのかもしれないが、心配になる。そして、情報というものが、子ども達もそうだし、親の間にもすぐ飛び交う。あそこの指導されている〇〇さんは、こんなこともしてくれている。なにか、先が見えないというか、こんがらかってしまうような、状況にならないか心配がある。

委員：大会やコンクールとか、そういう部分は困ると思う。例えば、大人がやっている公民館活動に、たとえば中学生が来てくれたら、新しい若い人の感性を感じる事が出来て楽しそうである。公民館活動の水彩画等の活動とかで、大人の人達がすばらしい絵を、文化祭とかで発表しているが、そのような所に中学生が参加したら、絵がうまくなるのではないかと思ってみたりする。ただ、夜の時間や、土日や平日の時間帯とか、なかなか難しいのかなと思う。運動の方では、大会とか目指さないなら、大人と一緒に活動出来たらと思う反面、体力的なところで差があると思うところもあるが、地域の公民館活動に中学生も一緒に参加してもらったら、楽しそうである。

委員：どういう形になっていくのかなって思う。たしかに、中学の先生方は部活の指導で、ほとんど土日、家にいないとか、そのような話をよく聞く。それは大変なので、そういうことを少なくしていこうという考えも、すごくよく分かるが、地域でと言ったら、どのような形になっていくのか、どんな形の活動になるのか考えてみるが、想像がつかない。公民館活動であれば、中学生が、学校が終わってそこに行く。それとも、今みたいにクラブの時間にそこへ行くとか、なんかぴんと来ない。合唱や吹奏楽とかも、どうやっていくのだろう。どこの中学校とかではなく、伊那市全体でとか、好きな子たちが集まって行いう形にしていくのか、昔と今は変わっていることは分かりつつも、想像がつかない。

委員：地域移行をした場合の指導者の報酬の支払いは、保護者がするのか、行政が負担をするのか、今後の詰めていく部分だと思うが、保護者負担になった場合、今現在は、保護者は、道具だとかそれに関わる負担のみで済んでいるが、地域移行して、指導者給与の支払いも生じた場合、どのようになるのか考えてしまう。

委員：第9回のキャリア教育上伊那交流会で、このテーマで分科会があった。それを見て、社会教育委員の皆さんが、全員で共有をし、地域移行する中で、学校教育でないとするれば、

生涯学習の教育、社会教育の場面であると思った。課題は山ほどある。お金の問題もそうですし、場所の問題もそうである。事故が起きたときの保険の問題もそうである。部員が少なくて中学校の生徒が、土曜日や休みの日に、3校と一緒に合同で練習するときはどうするのか。その他にも、事務局の説明のとおり課題は山ほどあって、それを今のうちに、皆さんが共有した中で、これから先の関わり方をお互いに共通認識をしようということでのこのテーマを提案させていただいた。

委員：たくさんの地域の皆さんが、この大きな学びの改革にご協力いただくことは、なんとも言えないが、スポーツにはスポーツの大変さ、学校それぞれの事情があると思う。地域や、市民のやっている活動、例えば市民体育、地域のクラブ、文化交流の活動等で、地域移行とは別の切り口になるかもしれないが、まずこの3年あるなかで、実験的にやってみていただくひとつのきっかけとして、中学生が地域の大人と一緒に、文化的なことを行う流れを、それぞれの公民館で活動している大人と、活動できるようなものを週1日でもいいので中学生向けに行い来てもらえれば、地域の大人の皆さんが活動を一緒にしてくれる。しかし、その大人の皆さんが本格的に活動しているのは、夜であったりすると、中学生の皆さんはそこに参加するのは難しいかもしれない。地域で活動している流れと一緒にやりませんか、というような形で公民館に寄って、美術やコーラスや舞踊の人達が教えてくれるという切り口のものが、負担のない範囲の中で、子ども達がそこへ繋がりを求めていくことが起こせると、国の方針次第だが、地域の中で子供たちが学びながら、多様な可能性に触れることが出来る。美術部に入っているのも他のクラブに入ることが出来ないということではなく、短歌をやってみるとか、いろいろな事を行うことが出来るきっかけになると思う。何か、地域で行っている、スポーツ系は難しいかもしれないが、文科系のものは、そのようなことが地域発動で出来ると素敵である。

委員：人数が少ない学校は、クラブの選択肢が少ない。例えばサッカーがしたいとか、吹奏楽がしたい人がいたら、例えば、伊那市全体で行うとか、そのようなことが出来れば、今ある選択肢以外のことをやりたい子どもにとっては、良いのではないかと思う。

(2) 学校教育等との公民館活動のあり方

(生涯学習課長より概要説明)

委員：現在行われていることは、どちらかというとイベント的に行っているだけで、少しも日常的になっていない。行うのであれば、どういう目的にしる、日常化するような動きをもっていかなないと、なかなか成果が出てこないのではないか。

委員：こちらに上がっているそれぞれの企画も、必要性和そこに対して求めている流れの中でのことだと思うが、地域や社会教育員の皆さんの働きかけによって、また、次のステップに行くのかなと思う。地域の大人が持っている共通課題で、日常化という話があったが、例えば、伊那市全体で行う河川清掃で、中学生になった子どもに参加してもらった。ご近所の方とは、ほとんど会わないため、「どこの家の方ですか」となる。地域の抱えている祭りの継承者がいないとか、地域のごみの問題とか、生活環境の問題を、自分の子どもに話をしてやってこなかったと反省がある。

地域活動とか、地域の願いやお祭りなど、縦割りでPTAの方に任せると、多くが、こな

し行事になってしまう。下手をすると、公民館活動もこなし活動になっていて、皆やりたくないけど、役が来たのでやらなくてはという姿勢が定着すると、まず、自分の家族も参加させるという発想にならない。これだけ後継者がいなく、様々な問題が山積しているのに、なぜその問題を一緒に解決する者を出してこないのかと感じている。イベント事業には人が来るが、実際に自分たちが何かを伝承していくとき、私たちの世代を見たとき、後ろに流せていないという反省がある。子どもたちに、この年になったらこの役をやりなさいということを送っていく。私たちも、先人が行ってきてくれたおかげで今がある。後ろからくる人達に、役割も、楽しみも、意味合いも、譲っていく感覚で、何世代も物事を渡していくことをしていかないと終わってってしまう。学校教育に限らず、公民館活動はこれから大きな地域伝承のキーになる。やはりそれは、イベントではなく、日常化で声をかけていくことを、社会運動的に行っていくにならないタイミングであると感じる。

委員：大きなイベントや活動だと、どんど焼きとか、確実にみんな一緒に遊ぶ。そういう時だと繋がっていく。ちょっとした、掃除であるとかは、子どもたちの数も少なくなってきており難しい。せめて大きなイベント等で、家族で来て、お餅を焼いて、いわれや言い伝え等の話をきちんとして、次につなげていけばよいと思うが、ちょっとしたことなど、繋がっていくのは、なかなか難しいのかもしれない。

委員：自分の地区では、フランクフルトやマッシュマロを焼いている。何か努力しないと意味を感じなくなっていくのではないか。活動やイベントがコロナでなくなってしまったのは、本当にコロナのせいなのかと最近少し思う。意味があるものは続けた方がよいということを書いていかないと、ただのバーベキューになってしまう。

教育長：6年ぐらい前の話だが、地区の公民館で、いろいろさせていただいたが、夏にマスつかみ大会があった。後で大反省をしたが、地区の川で、一部を堰止めマスを放し、子ども達が掴めるようにした。子ども達は非常に喜んだが、全てを大人たちが準備をした。子ども達は大変喜んでくれ、大人たちが準備した方が上手に進行するのだが、毎年こういう流れで行っていてどうなのだろうと、思うようになると良いと思う。例えば、5、6年生は、ここの準備を一緒に行うようにする。また、チラシやビラなどは、子ども達に頑張って作ってもらい、配ることを子ども達が行うなど、そういうことをやりながら、子ども達の中に関わっている感じや、大人の人たちが準備してくれていたのだという感覚を、それとなく仲間を作りながら伝えていく。先ほどあった話で、子どもも作業と一緒に参加することは素敵であると思う。

中学生の自習室ということを行っているが、社会教育委員の方も、子どもたちのサポーターをずっとやってきてもらっている。その中で、子ども達に軽食を用意し、それを食べ、終了となるが、食会の皆さんが軽食づくりを行ってくれるようになった。そうしたことで、取り組み自体が少し広がったと感じる。子ども達がそこへ来て、自分の生活のリズムを自分で作りながら勉強をする。そういう場所があるということが、子ども達の中に入っていき、取り組みとしてずっとあるということが、まず大事なことであると思う。

6 その他

- ・今後の会議等予定について

上伊那地区社会教育委員研修会 12月13日(火)

7 閉会(副会長)